

おおみちいせき 大道遺跡

はじめに

大道遺跡は越谷市大字大道に位置し、平安時代から江戸時代まで続く複合遺跡です。大道地域では昭和 63 年頃から奈良時代・平安時代の土器が畑などで表面採集されていました。

越谷市教育委員会では西大袋土地区画整理事業に伴い試掘調査（遺跡の有無を確認する調査）を実施し、大道香取神社周辺において平安時代の土器や住居跡を確認しました。工事により遺跡は現状のまま保存できないため、平成 13 年 8 月から 1, 500 m²を対象として発掘調査を実施しました。



【図 1】全体写真

●遺跡の概要

大道遺跡は元荒川左岸の自然堤防上に作られた平安時代から江戸時代までの複合遺跡です。

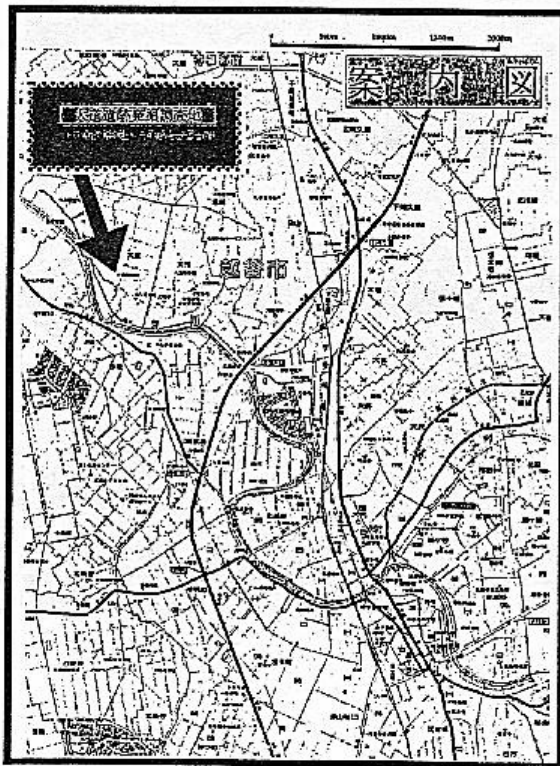
遺構は平安時代の住居跡（9世紀から10世紀）6軒、中世～江戸時代の溝6条、掘立柱建物跡1棟です。

●平安時代（今から約1,200年前）

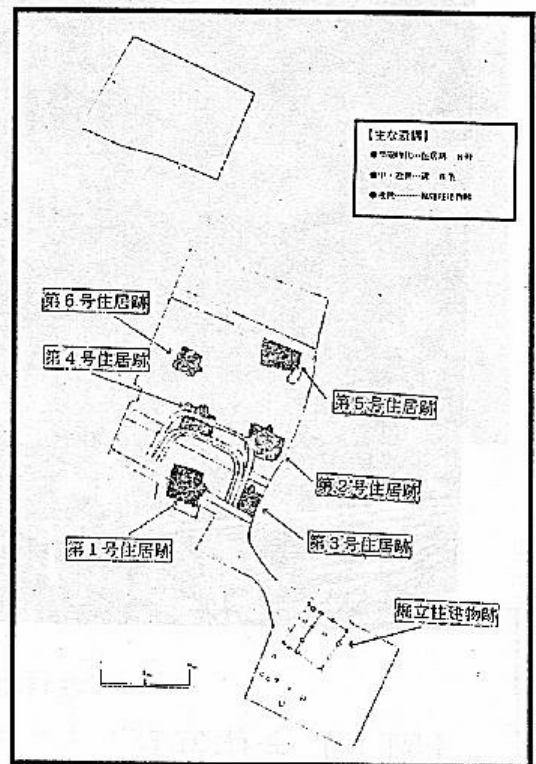
当時の一般的な住居は地面を深く掘り込んで建てた竪穴式住居です。一辺4～5mほどの方形で、柱を立てて上部に屋根をかけたものです。住居内には煮炊き用のカマドを備えていました。

大道遺跡では第1号住居跡、第3号住居跡、第4号住居跡、第6号住居跡からカマドが確認できました。とりわけ、第6号住居跡のカマドの中からは土師器の坏や皿が5個体出土しています。

遺物は土器（煮炊き用の甕や盛付け用の坏・皿など）が中心で、漁業用のおもり（土錘）や砥石なども出土しています。



【図2】遺跡位置図



【図3】遺構配置図

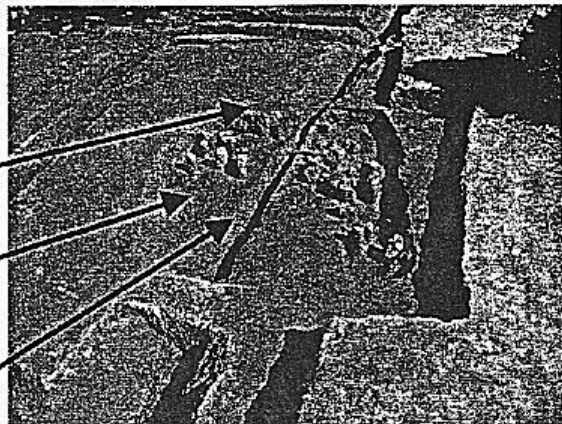
【図4】第1号住居跡

遺物出土状況

カマド

漁業用のおもり

中世から近世の溝（第1号溝）が平安時代の住居跡を壊している

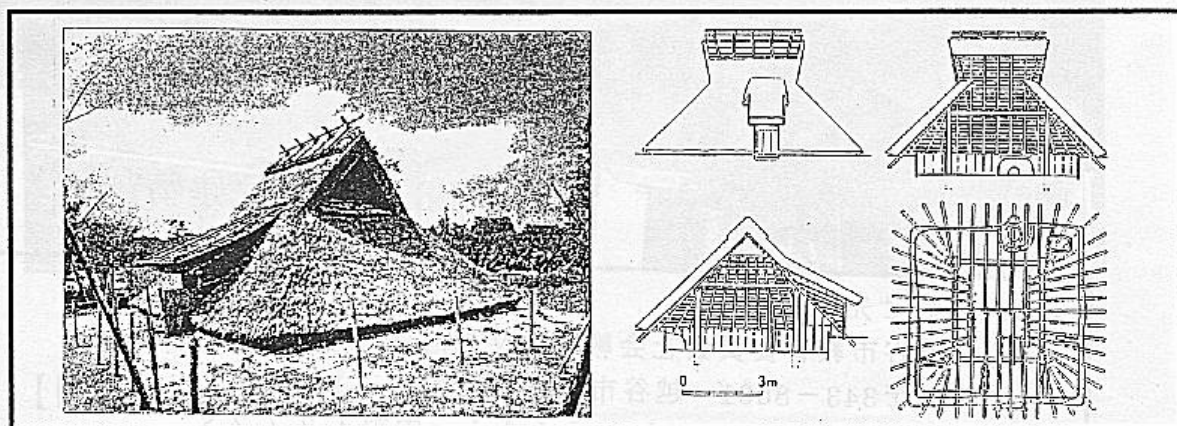
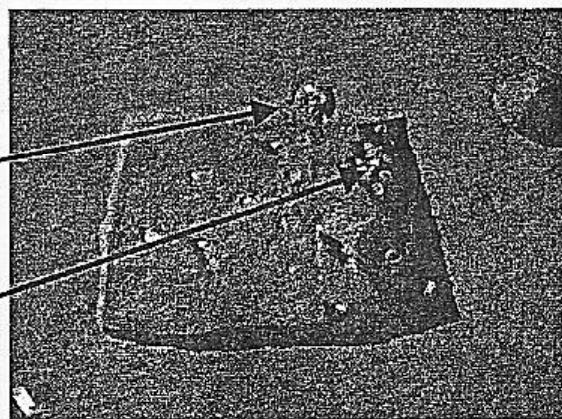


【図5】第6号住居跡

遺物出土状況

カマド

数種類の坏が集中して出土



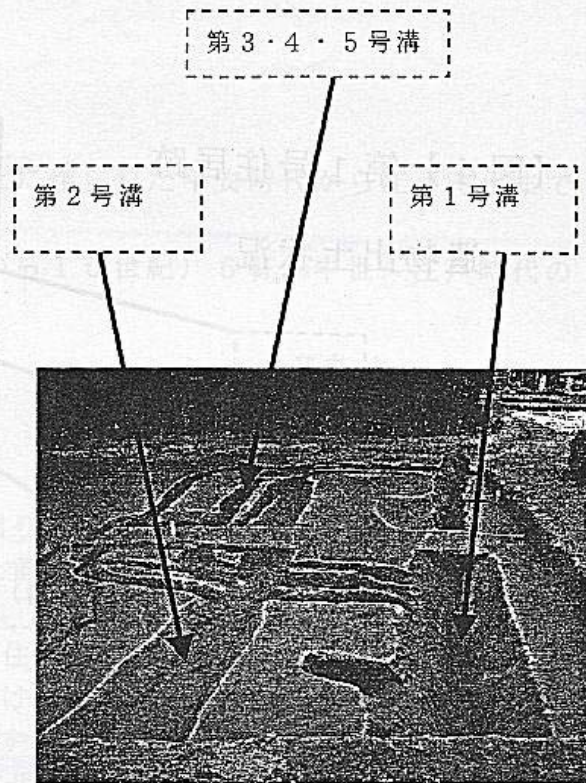
【図6】推定復元家屋

●中世～江戸時代

中世から江戸時代と思われる遺構は溝6条と掘立柱建物跡です。

<溝>

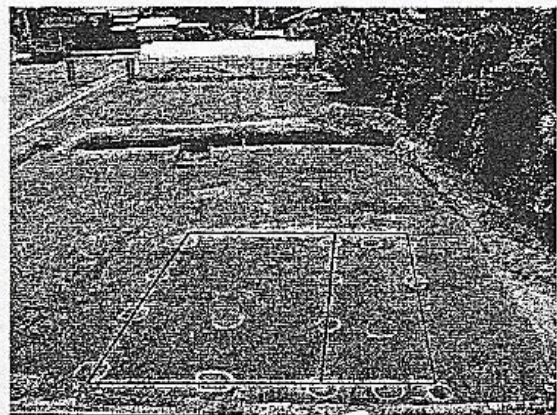
第1号溝及び第2号溝は上部の幅2.5m、底部の幅50cmほどの逆台形で、2条が幅1.5mほど離れて東西方向に平行に走っています。他の3本の溝(第3～5号溝)は第1号溝・2号溝と異なる方向で3本ともほぼ平行しています。



【図7】溝完掘状況

<掘立柱建物跡>

掘立柱建物跡は2間×3間の大きさで、神社の参道にほぼ平行しています。この地点はお寺があったとの言伝えがあることから、寺院に関する建物ではないかと考えられます。



【図8】掘立柱建物跡

<問い合わせ先>

越谷市教育委員会社会教育課文化財係

〒343-8501 越谷市越ヶ谷4-2-1

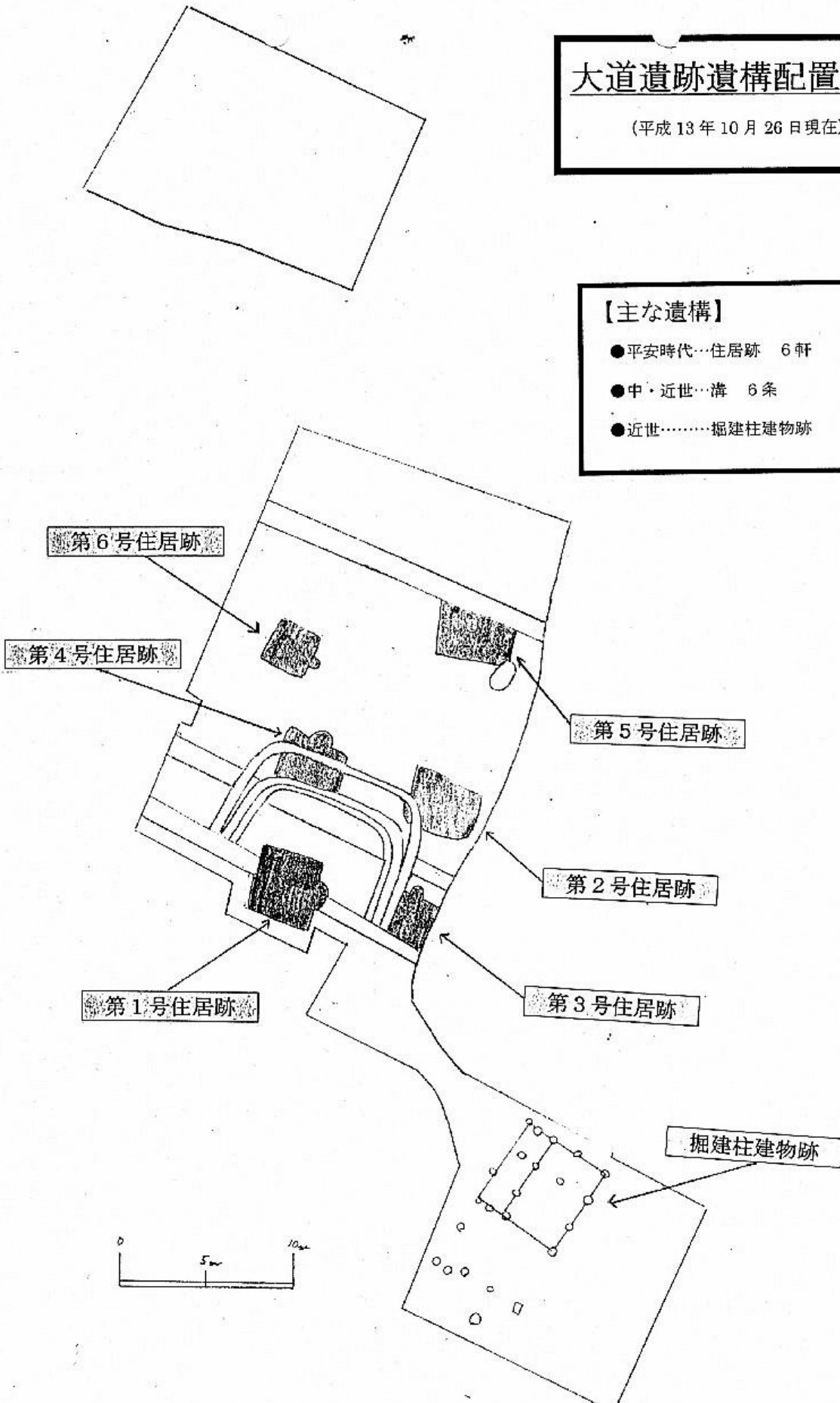
電話：048(964)2111 内線：2728

大道遺跡遺構配置略図

(平成13年10月26日現在)

【主な遺構】

- 平安時代…住居跡 6軒
- 中・近世…溝 6条
- 近世……掘建柱建物跡



大道とは

大道とは、大宝元年8月(701)律令が完成し翌2年10月に諸国に頒布され、同3年1月、七道に使い派遣し律令政治を巡察させている。七海道とは山陽道をはじめとする奈良朝廷の官道で、庶民はこれを通称大道と呼び、関東では東山道と東海道の、国府から国府を往来する道を国府路(こうじ)や大道と称し、国府路は時代と共に変化して「麴」や鎌倉期には既に「ふるみち」や大道(だいどう)と呼び地名残影が残されている。

東海道の豊島郡家、駅家から分岐した下総道には、葛飾郡の葛西隅田村と若宮村や上千葉村などには「大道」と「大道上・下」や「大道沿い」と云う呼び名の地名が残されています。この点は今年、群馬大学森田悌教授の著書「古代の武蔵」「日本古代の駅伝と交通」で、東海道下総道の、河曲・井上・浮島駅家の通過し下総国府に行く路地比定の論拠で、9世紀の書に隅田川の関屋(足立区)船舶の往来船泊など賑わいの話が記されてる事などで指摘したので、下総道の通過路次を訂正され大変喜ばれ礼状をいただき、現在も、古代武蔵国の歴史所感を文書で時々交換をさせていただいている。なをまた同志社大学名誉教授で退官した考古学で著名な森浩一先生の著書「関東学をひらく」の考古学論で、大島郷戸籍や、土師・桧前氏や、真土山(待乳山)聖天などと、下総路・奥州路の道筋について私論を述べたが、森先生は快く検討して自分の持論に汲み入れたいと礼状を下され、それ以来親しく文通させて戴いております。

東山道の新田駅から分岐して武蔵国府に行く途中の第1の駅家、宅口駅(妻沼町カ)を含み五駅を経て国府に至る支路の路次には、熊谷市今井の字「大道」近くに行田市上池守には字「長大道」が残されている。また『熊谷文書』で同氏の所領の内訳には、西を「大道」に限るとしている記録が見え、『小代文書』の承元四年三月十九日(1210)小代行平の譲り状にも「上略、よしたのむらの四至、東、なかぬまのしってをかきる、南、あとかわをかきる、西、大とうのふるみちをかきる、下略」この大道の古道は、鎌倉初期に『吾妻鏡』登場する、坂戸市片柳・吉田・赤尾など領した、東松山市正代を本拠地にして活躍した豪族、小代行平こと沙弥行運の譲り状である。『鎌倉遺文』832号。

武蔵国が、宝亀2年10月27日(771)所属替えになった東海道から武蔵国府への道は一つに相模国店屋駅家(たなやうまや)から分岐して行く支路と小高駅(川崎市小田中)からの分岐して多摩川沿いに行く道と、別に大井駅を過ぎ三田から桜田の霞ヶ関を通り局沢(千代田区皇居内)から左折して現在の甲州街道沿いの国府路(麴町)を過ぎて国府に行き、帰りは当時の駅間の距離30里(16キロ)から推測し〔乗ヌマ〕駅(杉並区天沼カ)から豊島駅(豊島区西ヶ原)に着きこれより台地を下り、町屋(荒川区)を過ぎ隅田川を渡り下総に至る下ツ道という。私は、中世の利根川が元荒川と合流する岩槻市の16号バイパスの岩槻大橋より下流の元荒川筋を、利根川下流筋と促え、また河川の蛇行は海退現象による海浜の渚線(ベイエリアと促えて、これを如実に示していると私著でこの説を論述している。

『中川水系総合調査報告書』に所収の、利根川流域河畔砂丘は、中世利根川筋の一支流の会の川筋には、新郷・岩瀬・砂山・須影・志多見・篠崎砂丘とつずき、別の流域の浅間川の原道砂丘と会の川と合流する栗橋町高柳や幸手市西大輪の砂丘群は比高と規模が大きく、久喜市青毛砂丘は規模は小さいが二条に成立し、杉戸町高野砂丘群は西側が長大

で、特に春日部・岩槻・越谷地区では、春日部の小淵砂丘が規模比高が大きく・浜川戸砂丘・長宮大光寺裏砂丘・袋山砂丘・大林砂丘・大房(北越谷)砂丘・東小林砂丘・大相模砂丘が見られ、また古利根川沿いには藤塚砂丘・松伏砂丘・赤岩砂丘が見られ、土砂の地質分析による元荒川の利根川筋と、古利根川筋は明らかに相違が見られ、特に重い鉱物の粒度含有比例が異なり、これを如実に示しているが、勿論、下流の大林・大房・東小林・大相模砂丘になると藤塚・松伏・赤岩砂丘との相違は少なくなるが、これは当時、河川の流量相違を示すものであろう。最終末の河畔砂丘は『中川水系総合調査報告書』に記述はないが、元荒川と古利根川の合流点にあたる吉川の延命寺裏山の砂丘であるが、越谷の天巖寺砂丘は墓地となり削平されている。

話題を「大道」に戻して、数年前「さいたま地名考」を埼玉新聞で連載するにあたり『新編武蔵風土記稿』の全編をめぐり村・大字・小字を丹念に調べると東海道の武蔵国府路と縦横に連絡する重要な地方支道が幾重にも走り、そこには大道・麴谷・麴屋が数多く散在していることが見られた。

下総国府より船で太日河や利根川を上下する場合と、河沿いの道を徒歩で往復する場合があり、元荒川(利根川)の自然堤防の土手沿いの道は比高があり、低湿地帯では当然便利であることには論をまたないが、これが越谷市の「大道」にも比定される地名と想定できようが、私論には各位様のご批評を賜りたい。

終わりに平成4年6月の『古志賀谷誌』で、宮川進先生が、研究史・海はどこまできていたかとか? 「埼玉県東部低地における遺跡調査報告」とその他の史料を駆使して、主に中世利根川(元荒川)流域、多くは旧新方領域内の古代遺跡の所在地を詳細に述べられているが、少年時代に春日部市八木崎の前耕地田圃より、弥生土器片、同じく藤塚・銚子口よりも土器片を採集した経験があり、また昭和43年には、私の生まれた谷原新田の沼湿地の字大沼より弥生中期の完形の土器が出土している。「谷原新田遺跡」

この所は地形迅速図でみると水畑(バックマシー)の地である。当時こと故に発掘調査は行わず工事が進められ、現在は関東郵政局のグラウンドに変わっているのは誠に残念であるが、また本研究会員の山本泰秀氏が増林の城ノ上から採集された、縄文・弥生土器片の散布地も迅速図で見ると水畑(バックマシー)と推測される。

今回、大道の香取神社付近から平安時代の住居跡の発見も地理的に見ても「代官免・二階」などの地名や、また江戸時代中期旧河川の対岸、袋山の耕地名に「三田方」が所在していることは、大相模地区の「見田方」と同じくするもので律令制の、国衙・郡衙に付属する地名であり、その開発は奈良・平安時代にさかのぼるものであろう。

隣部落の三野宮には「御手作」などを地名が残されているが、下総三ノ宮ではないかと憶測される時もあるが、それは何れとして、これからも川沿いにかけて工事の時など注意深く観測すると多くの住居跡や古い土器の続々発見や出土採集される事を期待し結びとします。

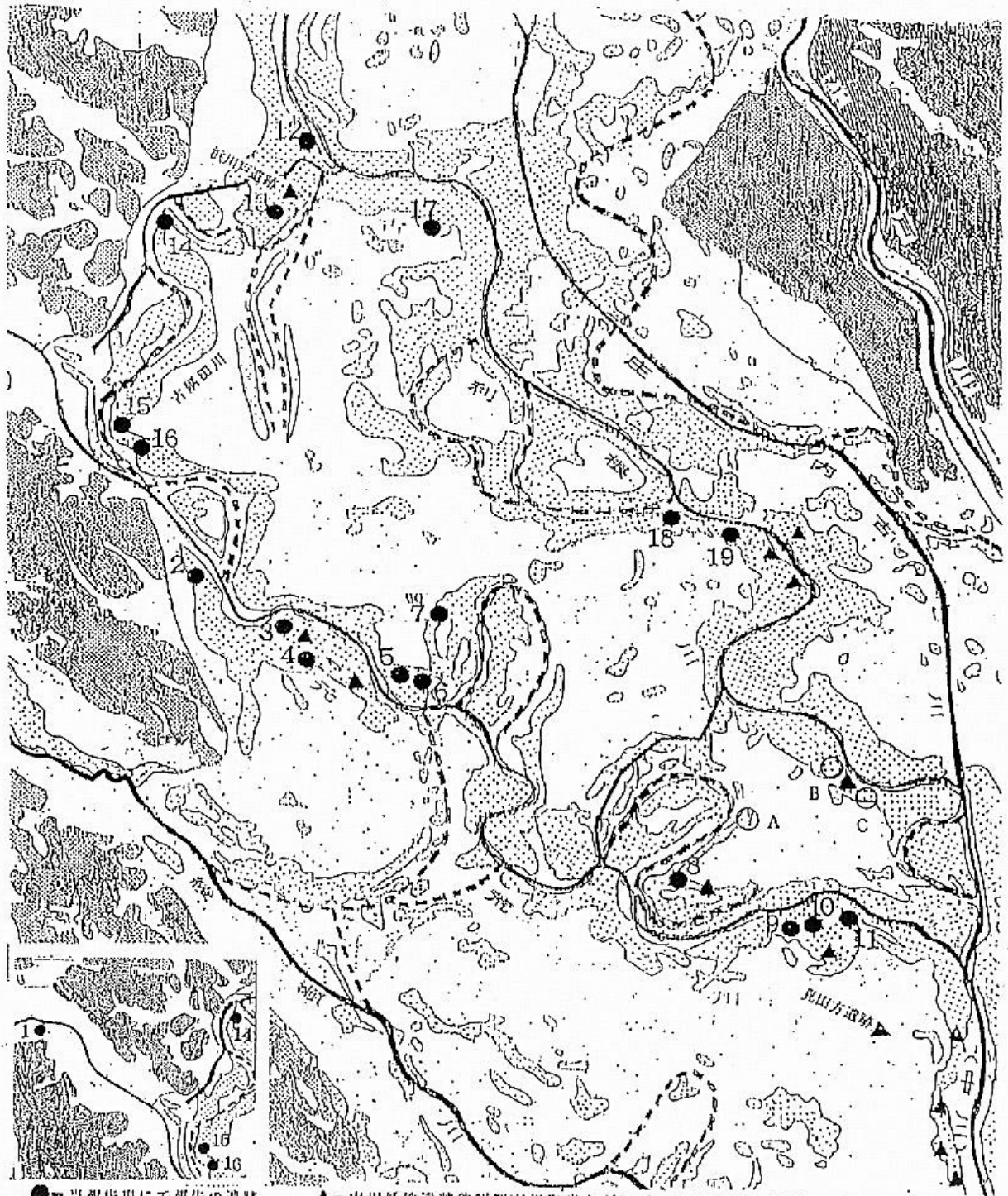
2001年6月

国際大学協会公認、総合歴史学名誉博士号拝受

岩井 茂

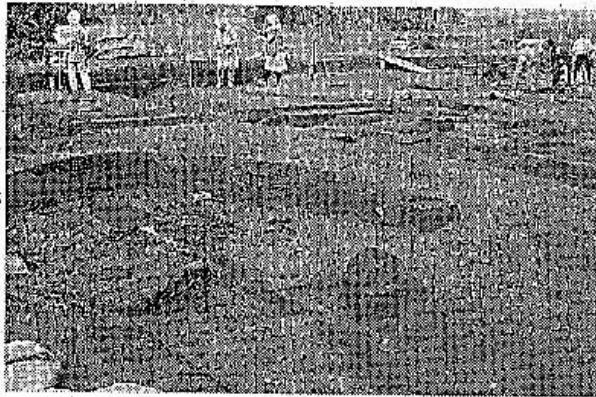
hp://www.sakitama.com/☎048-887-8432. fax048-886-2953

埼玉県東部低地遺跡分布図



●=当報告内にて報告の遺跡 ▲=中川低地遺跡確認調査報告書などにて、すでに周知の遺跡 (当低地には、他に春日部市谷塚新田遺跡=弥生中期=があるが、土器出土の正確な場所不明のため、本地図に記入は省略した)
 —=現河川 - - - =過去の河川流路 (一部は推定) 〰=台地 〰=自然堤防
 土地分類基本調査 大宮 埼玉県開発部調整課 73.3発行 野田(埼玉県内)埼玉県企画財政部土地対策課 80.3発行の地形分類図を参考とした。

埼玉県東部低地における遺跡調査報告 宮川進 =越谷市郷土研究会会報第7号(H4.6刊)の地図に山本泰秀氏の越谷市増林での調査成果を加筆



平安時代前期の竪穴住居跡が発掘された越谷市の「大道遺跡」

越谷「大道遺跡」

五つの竪穴式住居跡

平安前期、市内初の出土

越谷市教委が発掘調査を進めていた同市大道地区で、平安時代前期のものと思われる竪穴式住居の跡5個が見つかった。

元荒川の自然堤防だったとされるこの一帯で、当時の人々の生活を推察する手がかりとなり、市教委文化財係の橋本充史さんは「旧大袋村の郷土史をひも解く貴重な資料」と話している。

この大道遺跡(仮称)が発掘されたのは、香取神社西側の畑の地中約1メートル。うち3個からは火を燃やした跡が残るかまど

や辨却灰、土坑、魚釣りの罫、土師器なども多数、見つかった。市教委は、これらの出土品や出土状況などから約1200年前の住居跡と推定。平安時代前期のものとしては、同市内で初の発掘となった。

越谷市郷土研究会の宮川進幹理事長によると、大道と隣接する三野宮地域は元荒川の自然堤防だったとも言われている。元荒川の流域は北から南へ過去3回移り変わって

り、大道遺跡について、宮川幹理事長は「旧大袋村など自然堤防時代の生活の営みを裏付ける資料」と話している。発掘は西大袋区画整理に伴い行われてきたが、同神社南側の畑からは三方針だ。【栗原一郎】

野宮の真言宗一乗寺の末寺とみられる江戸期ごろの寺跡地も見つかった。発掘は今月末まで続き、同市教委は発掘土器などを詳しく分析し、一帯の歴史を明らかにしていく方針だ。

1. 元荒川水系

番号	右左岸	採集遺物	時代	所在地	備考
1	右	縄文土器 土師器	縄文時代中期 奈良・平安	岩槻市金重飛地字里477他	
2	右	須恵器	奈良・平安	岩槻市飯塚字古川	針状物質
3	右	土師器 須恵器	平安 奈良・平安	岩槻市末田字宿1494他	針状物質
4	右	土師器 須恵器	奈良・平安 奈良・平安	越谷市野島278他	
5	左	土師器 須恵器	奈良・平安 奈良・平安	越谷市大道字上手85他	針状物質
6	左	土師器 須恵器	奈良・平安 奈良・平安	越谷市大道字上手187他	
7	左	土師器 須恵器	古墳・奈良・平安 奈良・平安	越谷市大竹字西浦	
8	左	土師器 須恵器	奈良・平安 奈良・平安	越谷市東越谷3丁目15他	針状物質
9	右	土師器	平安	越谷市相模町6丁目487付近	
10	右	土師器	奈良・平安	越谷市大成町1丁目2180	
11	右	土師器	奈良・平安	越谷市大成町1丁目2268-1他	

針状物質と注のあるものは須恵器のなかに針状物質を含んでいるもので、埼玉県内南比企窯跡群でつくられたと推定される。

2. 古隅田川水系

12	右	土師器	古墳・奈良・平安	春日部市梅田1丁目468他	五領式を含む
13	左	須恵器	奈良・平安	春日部市浜川戸2丁目2-14	浜川戸遺跡西限か
14	左	縄文土器	縄文時代中期	春日部市新方袋宮川耕地	
15	左	土師器 須恵器	古墳・奈良・平安 奈良・平安	春日部市増戸字天神原229他 真菰原16他	針状物質
16	左	土師器 須恵器	古墳・奈良・平安 平安	岩槻市長宮字前田1199他	針状物質

3. 古利根川水系

17	左	土師器	古墳時代前期	春日部市南3丁目14-4付近	五領式
18	左	須恵器	平安	越谷市船渡2101	
19	左	土師器	平安	越谷市船渡字下川原2322他	

3. 古利根川水系（山本泰秀氏による成果）

番号	右左岸	採集遺物	時代	所在地	備考
A	右	弥生土器 土師器	弥生時代後期 古墳時代前期	越谷市増林 1-33.34 47~49	
B	右	須恵器	奈良・平安	越谷市増林2662付近	
C	右	縄文土器 土師器 須恵器	縄文時代中期 縄文時代後期 古墳・平安 古墳・平安	越谷市増林4323-1他	

「平安時代」とはこんな時代……………
年表

西暦	和暦	天皇	摂関	日 本	中国(時代)	朝鮮(時代)	世 界
七四	延暦三	桓武		<p>2 大伴家持を持節征東將軍に任命 6 藤原種継らを造長岡宮使に任命 11 長岡京遷都</p> <p>9 藤原種継暗殺事件、皇太弟早良親王を廃す 11 安殿親王立太子</p> <p>1 近江国滋賀郡に梵釈寺建立 7 太政官院落成</p> <p>7 征東使任命 9 造宮役夫所出国の出挙利率を三割に減す</p> <p>6 阿比流為、征東軍を破る 9 征討軍帰京、將軍ら処罰</p> <p>7 大伴弟麻呂を征東將軍、坂上田村麻呂を副使に任命</p> <p>6 安殿親王病臥、卜占に早良の祟りと出る 諸国に健児を設置</p> <p>1 藤原小黒麻呂らに宇多村の視察を命じる 2 征東使を征夷使に改称 3 桓武、新京の地を巡覽 9 新京の宅地を班給</p> <p>1 征夷大將軍大伴弟麻呂に節刀を授く 10 新京遷都 11 山背を山城に改称、新京を平安京と命名 近江国古津を大津に改称</p> <p>1 平安京を祝う踏歌が行われる</p> <p>2 『統日本紀』撰上 11 田村麻呂を征夷大將軍に任命</p> <p>4 王臣家の山野占有を禁止 11 京中流入者の隠首括出を禁ずる</p> <p>6 畿内班田を一紀一班(二年ごと)とする</p> <p>1 田村麻呂、胆沢城築城</p> <p>3 最澄・空海ら遣唐使に随行して入唐(各々八〇五、八〇六年に帰国)</p> <p>12 徳政相論(軍事、造作を中止)</p> <p>3 桓武崩御 5 六道觀察使設置 7 平城天皇、遷都しない旨を表明</p> <p>2 參議の号を廃止 11 伊予親王事件</p> <p>4 平城天皇讓位、嵯峨天皇即位、高岳親王立太子</p> <p>3 藏人所設置 9 薬子の變、平城上皇出家薬子自殺 高岳廢太子、大伴親王立太子 ○この年はじめて賀茂斎院を置く</p> <p>4 文屋綿麻呂を征夷大將軍に任命</p> <p>2 神泉苑にて花宴を始む 11 空海、高雄山灌頂を行う</p> <p>5 嵯峨の皇子女三二人に源朝臣姓を賜い、臣籍降下 6 万多親王ら『新撰姓氏録』撰上 ○『凌雲集』(初の勅撰漢詩文集)成る</p> <p>7 夫人橘嘉智子を皇后となす 国司の任期を四年に定む</p>	唐	新羅	<p>七五 顔真卿(唐人)没</p> <p>七五 フランクフルト公会議</p> <p>八〇 カール大帝加冠、西ローマ帝国復興</p> <p>八二 杜佑『通典』成立</p> <p>八六 白居易『長恨歌』成立</p> <p>八〇 カール大帝、デーン人を征服</p> <p>八四 カール大帝没</p>
七五	延暦四						
七六	延暦五						
七八	延暦七						
七八	延暦七						
七九	延暦八						
八〇	延暦九						
八〇	延暦九						
八一	延暦二	平城					
八一	延暦二	嵯峨					
八二	延暦三						
八三	延暦四						
八四	延暦五						
八五	延暦六						

西暦	和暦	天皇	摂関	日本	中国(時代)	朝鮮(時代)	世界
八三三	元二	陽成	基経	9 藤原良房没、忠仁公と諡する	唐	八三三 黄巢の乱(一八八四)	
八三二	元三	陽成	基経	1 冷然院焼亡 4 左右檢非違使式を撰進 5 下総国で伴囚反乱	新羅	八三二 このころキエフ公国建国	
八三一	元四	陽成	基経	2 嵯峨院を大覚寺と改称 4 大極殿・小安殿など焼亡		八三一 デーン人、イングランド侵入	
八三〇	元五	陽成	基経	1 飢饉のため左右京に常平司を設置して官米を売る 4 大極殿再建開始 7 早炊のために神泉苑より出水			
八二九	元六	陽成	基経	3 出羽国で夷俘反乱 5 藤原保則を出羽権守に任命 6 小野春風を鎮守府将軍に任命し秋田城を救援させる			
八二八	元七	陽成	基経	3 反乱夷俘の平定の報が京に届く 10 大極殿再建完成 11 『文徳実録』撰上 12 畿内に四〇〇〇町の官田設置(元慶官田)			
八二七	元八	陽成	基経	12 藤原基経、太政大臣になる			
八二六	元九	陽成	基経	6 万事はまず太政大臣基経に諮問し、のちに奏聞することとする			
八二五	元一〇	陽成	基経	○この年石見国司上毛野氏水、郡司らに襲撃される			
八二四	元一一	陽成	基経	10 大宰府に来着の唐商人との私貿易を禁ず			
八二三	元一二	陽成	基経	8 官田百二十余町を諸司要劇料・番上料に充つ			
八二二	元一三	陽成	基経	6 阿衡の紛議 基経に關白の宣旨を下す 8 仁和寺創建			
八二一	元一四	陽成	基経	5 高望王らに平朝臣姓を賜い臣籍降下す 11 賀茂臨時祭開始			
八二〇	元一五	陽成	基経	10 修理左右坊条使を修理職に併合 ○春に讃岐守菅原道真掃京			
八一九	元一六	陽成	基経	1 關白太政大臣藤原基経没 2 菅原道真を藏人頭に補す			
八一八	元一七	陽成	基経	5 『三代実録』編纂開始 菅原道真ら、『類聚国史』を撰修す			
八一七	元一八	陽成	基経	5 新羅の賊が肥前国に来襲 9 菅原道真、『新撰万葉集』を撰進			
八一六	元一九	陽成	基経	4 新羅の賊が対馬に来襲 8 菅原道真を遣唐大使に任命 9 道真の建言により遣唐使派遣中止 11 左右檢非違使庁を定む			
八一五	元二〇	陽成	基経	3 王臣諸家の私出挙を禁止 8 六位以下の乗車を禁ず 12 檢非違使の職掌・誣告人反坐の制を定む			
八一四	元二一	陽成	基経	間1 朱雀院に行幸し諸工の造作を覽す			
八一三	元二二	陽成	基経	7 宇多天皇、讓位に際して醍醐天皇に遺詔(寛平御遺詔)を賜う			
八一二	元二三	陽成	基経	○菅原道真・藤原時平、内覽を命ぜらる			
八一一	元二四	陽成	基経	2 藤原時平を左大臣、菅原道真を右大臣に任命			
八一〇	元二五	陽成	基経	8 道真、菅家三代巢献上 11 三善清行、明年辛酉革命の議を提出			
八〇九	元二六	陽成	基経	1 道真、大宰権帥に左遷(翌々年没) 8 『三代実録』撰上			
八〇八	元二七	陽成	基経	3 延喜の莊園整理令、班田を一紀一班とする			
八〇七	元二八	陽成	基経				
八〇六	元二九	陽成	基経				
八〇五	元三〇	陽成	基経				
八〇四	元三一	陽成	基経				
八〇三	元三二	陽成	基経				
八〇二	元三三	陽成	基経				
八〇一	元三四	陽成	基経				
八〇〇	元三五	陽成	基経				
七九九	元三六	陽成	基経				
七九八	元三七	陽成	基経				
七九七	元三八	陽成	基経				
七九六	元三九	陽成	基経				
七九五	元四〇	陽成	基経				
七九四	元四一	陽成	基経				
七九三	元四二	陽成	基経				
七九二	元四三	陽成	基経				
七九一	元四四	陽成	基経				
七九〇	元四五	陽成	基経				
七八九	元四六	陽成	基経				
七八八	元四七	陽成	基経				
七八七	元四八	陽成	基経				
七八六	元四九	陽成	基経				
七八五	元五〇	陽成	基経				
七八四	元五一	陽成	基経				
七八三	元五二	陽成	基経				
七八二	元五三	陽成	基経				
七八一	元五四	陽成	基経				
七八〇	元五五	陽成	基経				
七八九	元五六	陽成	基経				
七八八	元五七	陽成	基経				
七八七	元五八	陽成	基経				
七八六	元五九	陽成	基経				
七八五	元六〇	陽成	基経				
七八四	元六一	陽成	基経				
七八三	元六二	陽成	基経				
七八二	元六三	陽成	基経				
七八一	元六四	陽成	基経				
七八〇	元六五	陽成	基経				
七八九	元六六	陽成	基経				
七八八	元六七	陽成	基経				
七八七	元六八	陽成	基経				
七八六	元六九	陽成	基経				
七八五	元七〇	陽成	基経				
七八四	元七一	陽成	基経				
七八三	元七二	陽成	基経				
七八二	元七三	陽成	基経				
七八一	元七四	陽成	基経				
七八〇	元七五	陽成	基経				
七八九	元七六	陽成	基経				
七八八	元七七	陽成	基経				
七八七	元七八	陽成	基経				
七八六	元七九	陽成	基経				
七八五	元八〇	陽成	基経				
七八四	元八一	陽成	基経				
七八三	元八二	陽成	基経				
七八二	元八三	陽成	基経				
七八一	元八四	陽成	基経				
七八〇	元八五	陽成	基経				
七八九	元八六	陽成	基経				
七八八	元八七	陽成	基経				
七八七	元八八	陽成	基経				
七八六	元八九	陽成	基経				
七八五	元九〇	陽成	基経				
七八四	元九一	陽成	基経				
七八三	元九二	陽成	基経				
七八二	元九三	陽成	基経				
七八一	元九四	陽成	基経				
七八〇	元九五	陽成	基経				
七八九	元九六	陽成	基経				
七八八	元九七	陽成	基経				
七八七	元九八	陽成	基経				
七八六	元九九	陽成	基経				
七八五	元一〇〇	陽成	基経				
七八四	元一〇一	陽成	基経				
七八三	元一〇二	陽成	基経				
七八二	元一〇三	陽成	基経				
七八一	元一〇四	陽成	基経				
七八〇	元一〇五	陽成	基経				
七八九	元一〇六	陽成	基経				
七八八	元一〇七	陽成	基経				
七八七	元一〇八	陽成	基経				
七八六	元一〇九	陽成	基経				
七八五	元一〇〇	陽成	基経				
七八四	元一〇一	陽成	基経				
七八三	元一〇二	陽成	基経				
七八二	元一〇三	陽成	基経				
七八一	元一〇四	陽成	基経				
七八〇	元一〇五	陽成	基経				
七八九	元一〇六	陽成	基経				
七八八	元一〇七	陽成	基経				
七八七	元一〇八	陽成	基経				
七八六	元一〇九	陽成	基経				
七八五	元一〇〇	陽成	基経				
七八四	元一〇一	陽成	基経				
七八三	元一〇二	陽成	基経				
七八二	元一〇三	陽成	基経				
七八一	元一〇四	陽成	基経				
七八〇	元一〇五	陽成	基経				
七八九	元一〇六	陽成	基経				
七八八	元一〇七	陽成	基経				
七八七	元一〇八	陽成	基経				
七八六	元一〇九	陽成	基経				
七八五	元一〇〇	陽成	基経				
七八四	元一〇一	陽成	基経				
七八三	元一〇二	陽成	基経				
七八二	元一〇三	陽成	基経				
七八一	元一〇四	陽成	基経				
七八〇	元一〇五	陽成	基経				
七八九	元一〇六	陽成	基経				
七八八	元一〇七	陽成	基経				
七八七	元一〇八	陽成	基経				
七八六	元一〇九	陽成	基経				
七八五	元一〇〇	陽成	基経				
七八四	元一〇一	陽成	基経				
七八三	元一〇二	陽成	基経				
七八二	元一〇三	陽成	基経				
七八一	元一〇四	陽成	基経				
七八〇	元一〇五	陽成	基経				
七八九	元一〇六	陽成	基経				
七八八	元一〇七	陽成	基経				
七八七	元一〇八	陽成	基経				
七八六	元一〇九	陽成	基経				
七八五	元一〇〇	陽成	基経				
七八四	元一〇一	陽成	基経				
七八三	元一〇二	陽成	基経				
七八二	元一〇三	陽成	基経				
七八一	元一〇四	陽成	基経				
七八〇	元一〇五	陽成	基経				
七八九	元一〇六	陽成	基経				
七八八	元一〇七	陽成	基経				
七八七	元一〇八	陽成	基経				
七八六	元一〇九	陽成	基経				
七八五	元一〇〇	陽成	基経				
七八四	元一〇一	陽成	基経				
七八三	元一〇二	陽成	基経				
七八二	元一〇三	陽成	基経				
七八一	元一〇四	陽成	基経				
七八〇	元一〇五	陽成	基経				
七八九	元一〇六	陽成	基経				
七八八	元一〇七	陽成	基経				
七八七	元一〇八	陽成	基経				
七八六	元一〇九	陽成	基経				
七八五	元一〇〇	陽成	基経				
七八四	元一〇一	陽成	基経				
七八三	元一〇二	陽成	基経				
七八二	元一〇三	陽成	基経				
七八一	元一〇四	陽成	基経				
七八〇	元一〇五	陽成	基経				
七八九	元一〇六	陽成	基経				
七八八	元一〇七	陽成	基経				
七八七	元一〇八	陽成	基経				
七八六	元一〇九	陽成	基経				
七八五	元一〇〇	陽成	基経				
七八四	元一〇一	陽成	基経				
七八三	元一〇二	陽成	基経				
七八二	元一〇三	陽成	基経				
七八一	元一〇四	陽成	基経				
七八〇	元一〇五	陽成	基経				
七八九	元一〇六	陽成	基経				
七八八	元一〇七	陽成	基経				
七八七	元一〇八	陽成	基経				
七八六	元一〇九	陽成	基経				

平安時代と推定の 住居跡や土器片発見

越谷「大道遺跡」第2次調査

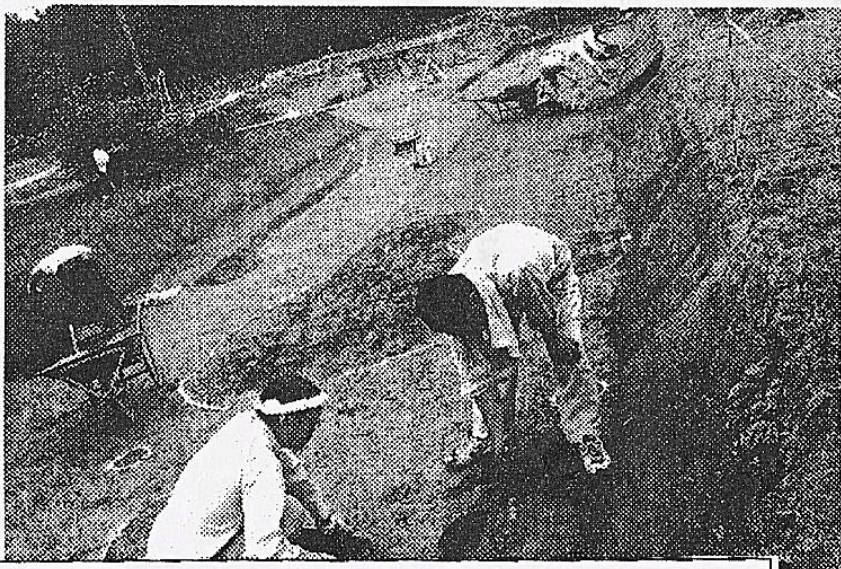
1200年前の平安時代の集落跡が見つかった越谷市大道の「大道遺跡」の第2次調査（市教育委員会の調査）で、同時代のものと推定される住居跡や土器片が見つかった。発掘作業は8月いっぱいに行われ年代分析など詳しい調査が行われる。

調査地点は、同市大道の香取神社に隣接する大道遺跡から東側約150メートルの畑（延べ1500平方メートル）。地下約1メートルで住居跡数カ所と土器の一部や黒っぽい焼却灰を確認した。市社会教育課は「前回調査と同時期の遺跡と想定している」と話している。

平安時代前期のものとしては市内初の大道遺跡

は、元荒川左岸の自然堤防上に作られた江戸時代までの複合遺跡と言われている。市教委は、西大袋土地区画整理事業に伴い01年7月から5カ月間、発掘調査を行った。同遺跡から竪穴式住居跡6カ所、土坑2基、溝6条のほか完全形のものを含め30点を超える土器、須恵器などが数々見つかっている。

【栗原一郎】



平安時代と推定される住居跡が見つかった大道遺跡の第2次調査地

越谷市の
大道遺跡

2次発掘始まる

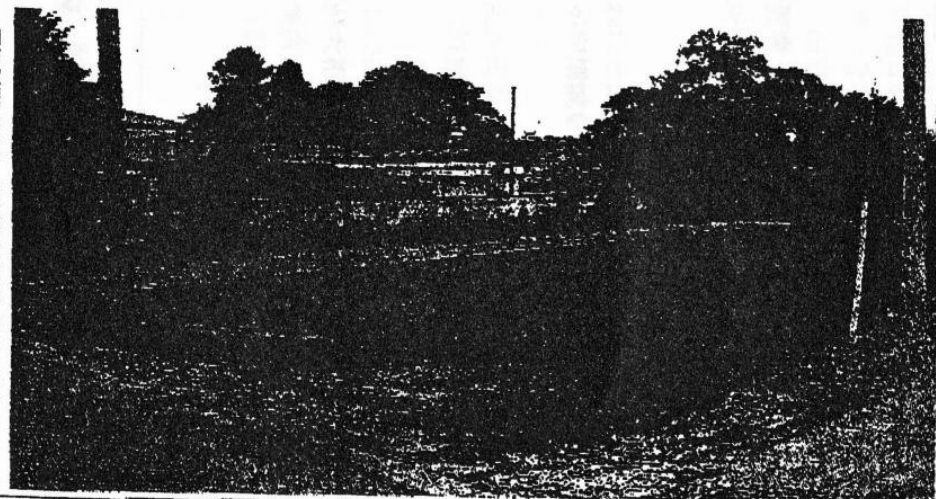
全容解明に期待感

2年前に土器など出土 平安期の集落か

越谷市の大道地区で発掘された「大道遺跡」の第2次発掘調査が十四日から始まった。同遺跡は平安時代（九世紀～十世紀）の集落跡で、第一次調査を平成十三年七月から十一月まで発掘調査をし、六軒の住居跡と土器や石器などが出土した。今回の第2次調査は前回の調査区域の東側100メートル程度の面積1500平方メートルを八月三十一日までの予定で調査をする。

第2次調査が始まった大道遺跡の発掘現場（越谷市大道で）

東武よみうり新聞 H15・7・21



跡の有無を確認する調査）を実施し、大道香取神社周辺で平安時代の土器や住居跡を確認した。又西隣部にある工事の現状の調査も予定がないため、平成十三年八月から1500平方メートルを対象に発掘調査を実施した。

大道遺跡は越谷市の北西部にあり、元荒川左岸、標高約5メートルの自然堤防上にある。平成十三年度の調査で見つかったのは平安時代の住居跡（八軒、土坑）と二宮一基、中世以降の竪穴土器、掘立柱建物（三つ）はしらたてもの跡一棟を調査した。土器は土師器（はじき）など二十点を発掘した。竪穴土器は、縄文期のおもりなどが見つか

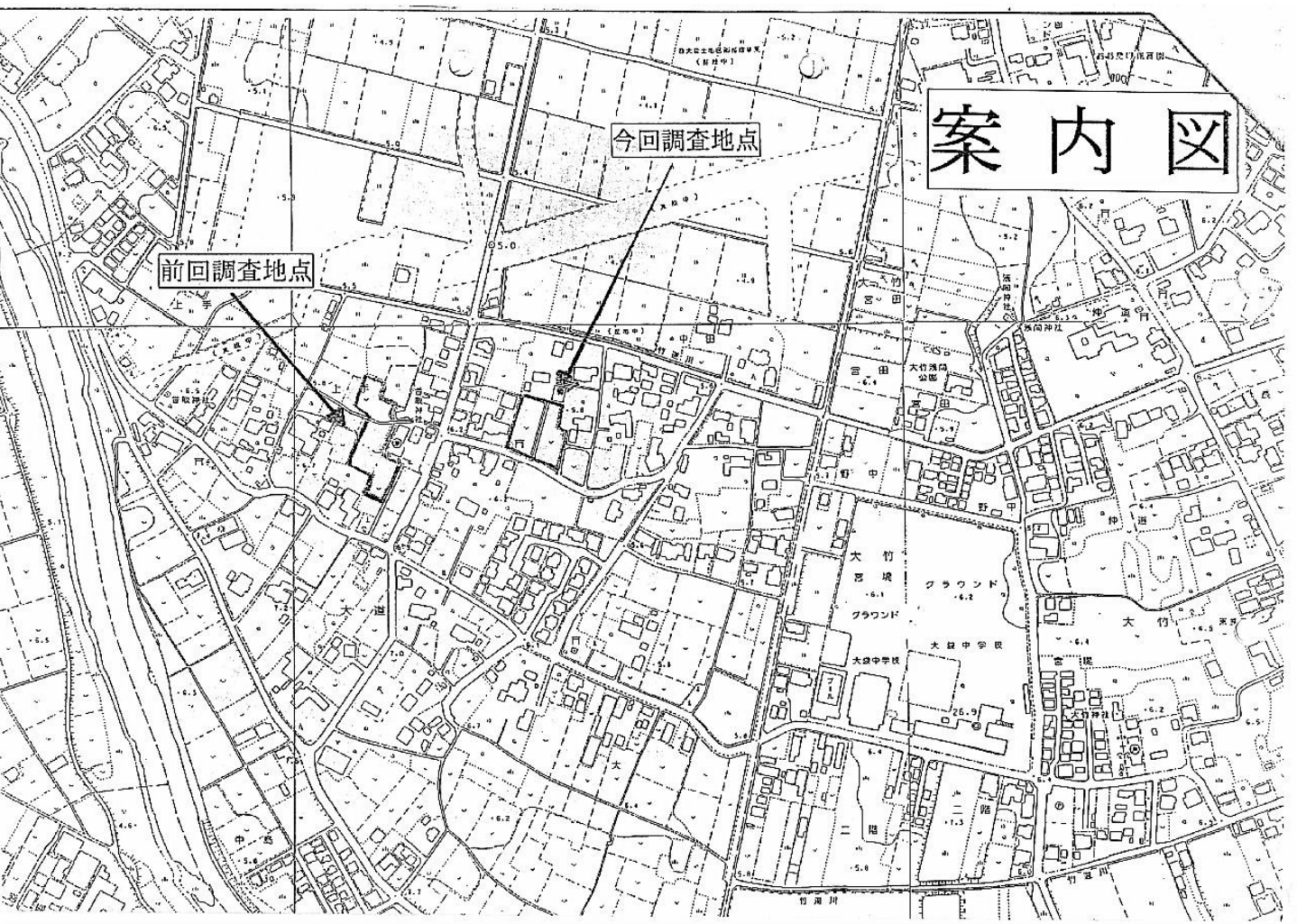
た。今から半二千年前の土器的な住居は地面を深く掘りこんで建てた穴穴式住居。一辺4～5メートルの方形で住を広くして土間に屋根をかいたもの。住居跡からはかましも確認され、田舎でも出土している。

今回の調査は、越谷市大道地区の平安時代の土器や住居跡の調査を目的として実施された。調査は、越谷市大道地区の平安時代の土器や住居跡の調査を目的として実施された。調査は、越谷市大道地区の平安時代の土器や住居跡の調査を目的として実施された。調査は、越谷市大道地区の平安時代の土器や住居跡の調査を目的として実施された。

案内図

今回調査地点

前回調査地点



第317回 史跡めぐりのご案内
越谷市内・大道遺跡・2回目の発掘を見る

平成13年の発掘に続いての発掘が行なわれて
します。「平安時代」の住居跡、土器を焼けた
穴などが発見されています。1千年前に越谷
に住んだ人達の残したものを見学しましょう!!

日 時 平成15年8月18日(月)

集 合 午前10時30分 大道(香取)神社前

①越谷駅東口より「岩槻駅」行きバス

午前9時34分発 野島下車 歩15分

②せんげん台駅西口より「県立大学」

行きバス 午前9時20分発

終点・県立大学下車 歩20分

③その他、くるま、自転車でも参加可

参加費 200円(資料その他) 交通費自弁

<今回は申込み不要。前日雨天などの場合は中
止し、19日(火)に延期。実施・延期は
で確認してください。

谷岡962-7527 堤竹962-1542 西村978-2927

◎24日(日)の講演会お申込みはお済みですか。

申込みがないと入場できないこともあります。

越谷市郷土研究会